

少納言のいはゆるからのをさしていひしにはあらず、然といへども、和泉式部の歌にみるに、猶

此世の物と覚えぬはと千載和歌集よみしは、全くからなでしこの事にて、からより渡りこし後は、山

野にをのれと生出るものをさして、大和なでしこといへるは、寛平の御時に、きさいの宮の歌合
を始とし古今和歌集それよりつきぐの撰集家などにその名をよみし歌殊に多し、扱やまとなで

しこは、小野の日あたりよき所に生出て、葉は少さきささの葉に似て、それよりは極めて細く、莖
は麥稈に似て、節ありて青くまたほそし、その高さ二三尺に至れば、梢ごとくにひとへなる五瓣の

花を開き、大さは錢程ありて、後に房をむすび、そのうちに少さき黒子あまたあり、またからなで
しこは、これにくらぶれば、その莖や、大く、葉もまた相似て少しく大いなり、花を開く事淺深紅

紫、また白花のものあり、此種は時珍の説に洛陽花といへるものにて、その花瓣の鋸齒ありて、缺
刻はなきもの也、また紹興本草に圖する所の絳州瞿麥といへるも、これと全く一物なり、また阿

蘭陀石竹、南京瞿麥、朝鮮なでしこ、やまと石竹の數種あり、いはゆる阿蘭陀石竹、朝鮮瞿麥の二種
は、後光明天皇の寛文中に渡りこしものなれども、廣益地錦抄今あるものは阿蘭陀石竹の一種の

みにて、その餘は皆詳ならず、また弘景の説に、一種葉廣相似而有毛、花晩而甚赤と、集注本草いへるは、
これ即今の仙翁花にて、寺島良安の説に、フデナケシ藤瞿麥葉厚形似匙首、其花數朶、形似桔梗、面白帶紫と、和漢

三才圖會いへば、共に今ある草なれども、眞の瞿麥にはあらず、
和漢三才圖會九十四末、瞿麥○中

按瞿麥即石竹也、今以爲二種、其葩周圍有刻齒而有切又、似剪紅紗者爲瞿麥、無切又者爲石竹並
出於豫州者良、丹波紀伊次之、

倭瞿麥、莖葉細弱、花有紅紫白赤斑爛單葉千葉數種、
南京瞿麥、株太莖細、而葉大於倭、其花單瓣紅、